

『地域政策研究』(高崎経済大学地域政策学会) 第16巻 第3号 2014年2月 1頁～14頁

# ノーベル賞の国際政治学

— ノーベル文学賞と日本:日本人初の文学賞候補、賀川豊彦(2・完) —

吉 武 信 彦

**International Politics of the Nobel Prize:  
The Nobel Prize in Literature and Japan, Toyohiko Kagawa,  
the First Japanese Nominee (2)**

Nobuhiko YOSHITAKE

はじめに

1 賀川豊彦と北欧

(1) 北欧訪問

(2) 著作の翻訳状況

2 ノーベル文学賞

(1) 選考過程

(2) ノーベル文学賞受賞者の傾向 (以上、第16巻第1号)

3 1947年の推薦 (以下、本号)

(1) 推薦の状況

(2) スウェーデン・アカデミーの評価

4 1948年の推薦

(1) 推薦の状況

(2) スウェーデン・アカデミーの評価

おわりに

### 3 1947年の推薦

#### (1) 推薦の状況

1947年文学賞に関するスウェーデン・アカデミー内での選考について見てみよう。1947年2月1日の締め切りまでに、35名の候補が推薦された<sup>1)</sup>。たとえば、候補にはエリオット (T. S. Eliot)、ジッド (Andre Gidé)、ヘミングウェイ (Ernest Hemingway)、マルロー (André Malraux)、パステルナーク (Boris Pasternak)、ショーロホフ (Michail Sjolochov) など、国際的に著名な作家、詩人も多かった。

その候補の中に、賀川豊彦も含まれていた。賀川は、35候補の中で唯一の非欧米諸国出身者であった。賀川は、推薦受け付け順の候補リストの第一番目に氏名が掲げられている<sup>2)</sup>。賀川を推薦したのは、スウェーデン王立文学史・古美術アカデミー会員、ウプサラ大学教授のヴェストマン (Knut Bernhard Westman) である。1946年1月31日付けの推薦状には、「1946年2月1日受理」とスウェーデン・アカデミー側により手書きで記されている<sup>3)</sup>。しかし、この推薦状は1946年の選考対象としては扱われなかった。わずかな時間差で同年の選考手続きに間に合わず、翌年扱いになったと考えられる。そのため、この受け付け順により1947年の候補リストではトップに賀川の名前がきたのであろう。表1は、賀川の2度にわたるノーベル文学賞推薦を表にしたものである。

表1 ノーベル文学賞候補、賀川豊彦の推薦者一覧

選考年	候補者	職業・肩書	推薦者	職業・肩書	推薦状日付 (差出地)
1947	賀川豊彦	作家	クヌート・ベルンハルド・ヴェストマン (Knut Bernhard Westman)	スウェーデン王立文学史・古美術アカデミー会員、ウプサラ大学教授	1946年1月31日付 (ウプサラ)
1948	賀川豊彦	作家	スヴェン・ヘディン (Sven Hedin)	地理学者、探検家、スウェーデン・アカデミー会員	推薦状なし。口頭?

註：職業・肩書は、基本的にスウェーデン・アカデミーの文書に使われたものを載せた。1950年までを対象にした。

出所：Bo Svensén, *Nobelpriset i litteratur: Nomineringar och utlåtanden 1901-1950, Del II 1921-1950* (Stockholm: Svenska Akademien, 2001) およびノーベル財団ノミネーション・データベースより、筆者作成。

ヴェストマンは、1881年にスウェーデン北部で生まれ、ウプサラ大学で神学を専攻した。1915年に神学の博士号を取得した後、牧師の資格を得るとともに、1920年、中国に宣教師として派遣され、1923年には中国・湖南省に設立された学校の校長にもなった。1930年から1948年までウプサラ大学神学部の教授 (伝道史・東アジア宗教史) を務めた。1967年に亡くなっている<sup>4)</sup>。この経歴に示されるように、ヴェストマンは宣教師としてアジアで活動するとともに、スウェーデンのキリスト教界において有力な存在であった。その専攻分野、経歴から、スウェーデンにおいて賀川の存在を早くから知る立場にあったと考えられる。

ヴェストマンとノーベル文学賞とのかかわりであるが、1950年までの記録によれば、ヴェストマンがノーベル文学賞に推薦した候補は賀川一人である。また、ヴェストマン自身が同賞に推薦された事実もない<sup>5)</sup>。彼の職業、専門分野からみて、ノーベル文学賞とほとんどかかわりがなかったことは、不思議ではないであろう。牧師であり、社会事業家であり、作家である賀川という存在が、ヴェストマンとノーベル文学賞を結びつけたと考えられる。

では、ヴェストマンはいかなる理由から賀川を推薦したのであるだろうか。ヴェストマンの推薦状はタイプ打ちA4判用紙4ページからなり、賀川の推薦理由が記されている<sup>6)</sup>。推薦状は、冒頭で「ここに署名人はノーベル文学賞候補として日本人、賀川豊彦を謹んで提案する」と述べ、具体的な賀川紹介を始めている。まず賀川について「現代文学において異例の存在である。すなわち、熱心に活動する行動人であり、キリスト教の伝道者であり、共同組合運動家であり、社会改革者であるが、詩や散文について紛れのない文才を有している」と指摘した後、賀川の創作の中に生きる日本として、矛盾に満ちた現代日本を紹介している。すなわち、歴史や自然の豊かさなどがある半面、人々が現代生活の厳しい問題（貧困、産業主義のストレス、農業の衰退、道徳的・宗教的混乱）に苦しんでいることを挙げている。そして、このすべてに対して支援し、救済し、対処することが賀川の生きる目的であるとしている。ヴェストマンは、改めて「彼は人間愛の伝道者であり、警醒者であり、戦士である」と性格づけ、これが彼のあらゆる創作を特徴づけているとする。さらに彼の創作物が燃えるような魂から生み出されたものであり、背景にある日本を型にはまらず劇的に暴こうとしているとも述べ、「ここに彼は世界文学に居場所を有している」とまとめている。

この後、ヴェストマンは、具体的に賀川の創作活動を紹介している。取り上げられているのは、スウェーデン語になっている5つの小説と1つの詩集である。小説では、『死線を越えて』、『太陽を射るもの』、『壁の声きく時』の3部作、『一粒の麦』、『乳と蜜の流るゝ郷』であり、詩集は『涙の二等分』である。それぞれについて、原著の発行年、スウェーデン語版の発行年、簡単な筋がまとめられている。3部作については、「3冊すべてのスラム小説は自伝的要素が強い。後の2冊は最も強い。3冊目で最後のものにおいては、神戸の評判の悪い新川の悲惨な路地から20年代初めの嵐のような不況とストライキの年の日本全国へと、視点が広がっている」と説明している。『一粒の麦』については、「恐らく小説の中で最善のものであり、作者の表現力がここで最も生き生きとし、具体的となり、話の筋は明確であり、よく肉付けされている」との評価が与えられている。

ヴェストマンは、これらの指摘から賀川をノーベル文学賞に推薦しているが、ノーベルの有名な遺言の中の言葉「文学で理想主義的な傾向の最も優れた作品を創作した」人物に触れ、賀川をその一人と見なしでも不当なことではないと結論づけている。

そのあとは、ヴェストマンは、賀川の日本語の原典を利用できず、英語、スウェーデン語でしか作品を知らないことに触れ、「彼の評価で重大なマイナス」と述べている。さらに、ヴェストマンは、翻訳されていない作品が多いことにも触れ、純文学以外にも多くの著作があることを具

体的な書名とともに紹介している。

なお、ヴェストマンによれば、この推薦状にはヴェストマンが1930年代初めに書いた賀川についての小論が添付資料としてつけられていた<sup>7)</sup>。

## (2) スウェーデン・アカデミーの評価

スウェーデン・アカデミー内のノーベル委員会は、1947年には以下の4名の会員から構成されていた。作家のエステルリング (Anders Johan Österling)、ルンド大学元教授のベーク (Martin Fredrik Böök)、作家のシヴェルツ (Per Sigfrid Siwertz)、作家のグルベリ (Hjalmar Robert Gullberg) である。同委員会の委員長は、エステルリングが務めた<sup>8)</sup>。

選考では、ノーベル委員会の各委員が35名の候補のうちから順位をつけて2名あるいは3名を選び出した意見書を出している。すなわち、エステルリングは (1) ジッド、(2) シケリアノス (Angelos Sikelianos)、(3) エリオットの3名である。ベークは、(1) シケリアノス、(2) エリオットの2名である。シヴェルツは、エステルリングと同様に (1) ジッド、(2) シケリアノス、(3) エリオットの3名である。グルベリも、エステルリングと同様に (1) ジッド、(2) シケリアノス、(3) エリオットの3名である<sup>9)</sup>。

これら4名の委員はさらに候補の調整を行ない、1947年9月16日付けで「委員会の多数 (エステルリング、シヴェルツ、グルベリ氏) は、第1推薦者としてジッドを推したのに対して、ベーク氏はアンゲロス・シケリアノスをこの地位においた」との結論をまとめている<sup>10)</sup>。すなわち、ノーベル委員会は、3名がジッドを、1名がシケリアノスを第1候補とした委員会案を作成したのである。この案はスウェーデン・アカデミー例会で全会員に提案された。

これを受けて同年11月13日、スウェーデン・アカデミーはノーベル委員会の多数意見であるジッドを「人間性の問題と条件が大胆な真摯愛と心理的炯眼とともに表明されている、広汎かつ芸術的重要性のある著作」を理由にして1947年受賞者に決定している<sup>11)</sup>。スウェーデン・アカデミーのジッド評価については、同年12月10日のノーベル賞授賞式におけるエステルリングの歓迎演説が詳しい。フランス文学界の巨匠として高く評価しているが、エステルリングは、ジッドが78歳になってようやくノーベル文学賞を受賞することになった点について以下のように弁明している。「彼の作品の重要性が、なぜこんなにあとにならなければ、正当な価値において評価できなかったのかと、いぶかる向きもあるかもしれませんが、アンドレ・ジッドは異論の余地なく、真の評価をするのに長い展望と、弁証法の三段階を包含するのに十分な時間のひろがりが必要とする類いの作家たちに、属しているからであります<sup>12)</sup>。また、後に文学全集のために選考過程について紹介をしたストレムベリイ (元パリ駐在スウェーデン大使館文化参事官) は、「おそらくアカデミーは、おのれが犯した過ちを思い出したのであろう。つまり、ジッド同様に世界的に知られたもう一人のフランス作家ポール・ヴァレリーに栄冠を授けることを、あまりにも長いことためらい、ヴァレリーはノーベル賞が与えられるはずだった年に亡くなったからである」

と述べ<sup>13)</sup>、高齢のジッドが選ばれた背景を説明している。ノーベル賞を受賞できなかったヴァレリー（Paul Valéry 1871～1945年）の件は、ジッド自身も残念に思っており、病気のため授賞式を欠席し、駐スウェーデン・フランス大使に代読してもらった受賞演説においてヴァレリーの思い出に多くの文言を費やし、彼に敬意を表している<sup>14)</sup>。

では、賀川については、いかなる評価であったのであろうか。結論から言えば、上記のように賀川はノーベル委員会の絞り込みにおいて4名の委員から有力候補として推薦されることはなく、スウェーデン・アカデミー全会員による最終決定の対象にもならなかった。1950年までの選考についてスウェーデン・アカデミーの史料を整理したスヴェンセンの著作によれば、賀川に関するノーベル委員会の評価は、以下の通りである。

「専門家の判断は、この日本人キリスト教伝道者の理想主義的人間性に高い評価を示しているが、その著作においては彼に作家としての大きな資質を与えることはできないとしている。委員の理解によれば、こうした状況下ではその提案を喜んで推薦することはできない<sup>15)</sup>。

このように、ノーベル委員会は、専門家の判断に基づき、候補の絞り込み過程で賀川を振り落とすことになったのである。賀川については、ノーベル文学賞候補として初めて推薦されたこともあり、ノーベル委員会は専門家に賀川に関する報告書を作成させ、それを判断材料にしたことがわかる。

その報告書は、1947年6月28日付けでハルストレーム（Per Hallström）が作成したものと考えられる<sup>16)</sup>。これは、現在、1947年の選考史料としてスウェーデン・アカデミーに所蔵されている。ハルストレームは作家であり、スウェーデン・アカデミー会員18名のうちの一人である。同報告書は、タイプ打ちA4判大の用紙9ページのものである。主な内容は、以下の通りである。

まずハルストレームは、賀川推薦状にヴェストマンの書いた簡単な伝記がつけられていることに触れ、賀川の著作を紹介するために必須の情報を簡潔にまとめる必要性を指摘している。これに続き、賀川の生い立ちに触れた後、少年時代にキリスト教の洗礼を受けたこと、さらに牧師となり、肉体労働者階級の苦境に同情を寄せ、人権・市民の権利を守るため、大衆を組織化しようとし、神戸での最初の大ストライキにかかわり、拘留されたことを記している。

さらに、神戸のスラム街での活動で目の病気にかかり、失明の恐れもあったことなども紹介している。また、第一次世界大戦時の日本の急速な産業化で生じた困難な社会問題の解決に取り組むことに乗り出すが、賀川は徐々に改革の実行を重視するようになる。これが労働者階級の組合権やストライキ権につながったとする。

このすべてにおいて賀川の貢献は極めて大きなものとなったとし、特にそれは大都市神戸のスラム街の一面で過ごした歳月について語ることで一般民衆の心を揺り動かししたことによるものであったとしている。

この後、ハルストレームは3部作の小説『死線を越えて』、『太陽を射るもの』、『壁の声きく時』について具体的にその内容を筋に沿ってかなり詳細に紹介している。その際、ハルストレームは

スラム街での子供や女性の運命にも触れ、売春の状況などにも言及している。

3部作の小説としての芸術性については、「それが提供したいものは、文学的芸術作品が与えてくれるようなものではない。著者はその非常に詳細で信頼できる証言を通じて読者を信じこませ、魅了したいだけなのである。その文体は極めて単純で直接的であり、しばしばまるで通知文のようなものである」と指摘している。

3部作のほかに、ハルストレームは詩集にも言及している。「痛みに耐えつつ生きるすべてのものに暖かい愛情を向ける賀川の子供の精神生活には確かに詩情は存在するが、それが言葉や調子でいかに表現されたかについては、外国人には判断しかねる」と述べている。

また、宗教的な著作などもかなりスウェーデン語に翻訳されているとするが、ハルストレームはその中でも『神による新生』に注目し、「彼の著作活動のこの分野で最も中心的で堪えうると考えられるものを描き出している」と評価している。

最終的にハルストレームは、以下のように報告書を結んでいる。

「しかるに偉大な人間というのは、彼の大きな目的をもった行動において耳を傾けられ、注視されるものである。それに対して、賀川は我々の理解するところの偉大な作家あるいは思想家ではない。このような人物には、文学的な栄誉はうまく合致しない。むしろ人間性の点において受賞を超越している。」

以上のように、ハルストレームの報告書は、人間としての賀川を高く評価し、賀川の活動に敬意を表するものの、主に3部作の分析を通じて作家としての資質について低い評価をし、ノーベル文学賞候補としては否定的な見方を提示している。そのため、これを受けて、ノーベル委員会も賀川に対して厳しい評価となったのであろう。

## 4 1948年の推薦

### (1) 推薦の状況

1948年の推薦状況は、いかなるものであろうか。この年の候補数は31名である<sup>17)</sup>。前年に比べると4名少ない候補数であるが、1945年の18名、1946年の22名からすれば、第二次世界大戦による混乱から徐々に復興する中で、ノーベル賞への関心も回復してきたといえるかもしれない。たとえば、この年には国際的に著名な候補としてチャーチル (Winston Churchill)、エリオット、マルロー、マン (Thomas Mann)、パステルナーク、ショーロホフなどが推薦されていた。

賀川は、1948年の選考でも推薦されていた。推薦したのは、地理学者、探検家として活躍したスウェーデン人、スヴェン・ヘディン (Sven Hedin) であった。彼は、1913年にスウェーデン・アカデミー会員となり、1952年に死去するまでその地位にあり、それを利用して賀川を推薦したのである。

簡単にヘディンのプロフィールを見ておこう<sup>18)</sup>。ヘディンは、1865年にストックホルムで生まれている。彼は、スウェーデンで地理学を学び始め、その後ベルリン大学に留学し、中国に造

詣の深い地理学者リヒトホーフエン（Ferdinand von Wilhelm Richthofen）の指導を受け、アジアへの関心を深めた。1880年代後半以降、実際にアジア各地への探検に乗り出し、それは1回あたり数年にも及ぶものであった。中央アジアへの長期の探検だけでも5回にわたり（1893～1897、1899～1902、1905～1908、1927～1933、1933～1935年）、1901年には楼蘭遺跡を発見している。これらの探検のたびに、彼は詳細な学術報告書を執筆し、中央アジアの未踏地域の地図なども作成している。また、探検記は一般の人々にも広く読まれ、多くの言語に翻訳された。そのため、彼はスウェーデン国内のみならず国際的にも著名な存在となった。その膨大な著作は中央アジア研究の基礎資料として学術的価値を有するものとされる。日本においても第二次世界大戦前から著作の翻訳が出され、戦後には著作集が出版されている<sup>19)</sup>。こうした著作活動から、ヘディンは表2の通り1912年、1913年の2度、ノーベル文学賞に推薦されている。また、前述の通り、スウェーデン・アカデミーの会員にも選出されたのである。

表2 ノーベル文学賞候補、ヘディンの推薦者一覧

選考年	候補者	推薦者	職業・肩書	選考結果
1912	スヴェン・ヘディン	フレドリック・ヴルフ (Fredrik Wulff)	スウェーデン・ルンド大学教授	受賞者はドイツのハウプトマン (Gerhart Hauptmann)
1913	スヴェン・ヘディン	フレドリック・ヴルフ (Fredrik Wulff)	スウェーデン・ルンド大学教授	受賞者はインドのタゴール (Rabindranath Tagore)

註：職業・肩書は、基本的にスウェーデン・アカデミーの文書に使われたものを載せた。1950年までを対象にした。

出所：Bo Svensén, *Nobelpriset i litteratur: Nomineringar och utlåtanden 1901-1950, Del I 1901-1920* (Stockholm: Svenska Akademien, 2001) およびノーベル財団ノミネーション・データベースより、筆者作成。

しかし、彼は地理学者、探検家であるとともに、現実の政治にも深い関わりをもった人物であった。特に、生涯、親ドイツ的な立場をとり、1930年代以降はナチス・ドイツに対しても理解を示した。実際に、第二次世界大戦終結までヒトラー (Adolf Hitler) をはじめナチス幹部との親交も続けた。ドイツとの交流の50年間を振り返った著書『獨逸への回想』(原著は1938年にベルリンにてドイツ語で出版)において、ヘディンは以下のように記している。

「地理的には吾々の隣人であり、人種的には同じ種族であり、強国時代には戦友であるドイツ人は、吾がスウェーデンに対して、己れの犠牲において教訓をたれてくれた民族である。吾々は、吾々自身のために、そして平和のために、この民族との間に親愛と信頼を保たねばならぬ。たとへばナチス世界観の一部に同意出来ないものがあるとしても、彼らのやり方に不親切な批評をしてはならない。彼らのやり方は、ドイツ国内の仕事を秩序あるものとするために採用したものである。

ドイツを敵視してゐる国々の連中は、よく、ドイツには自由がないと云つて非難する。しかしさういふ人物は、厳たる規律を施かぬ独裁者は直ちに亡びて了ふこと、新ドイツを支配してゐる不自由の程度は、ベルサイユ条約によつて創られた奴隷状態に比べれば、まさに天国であ

ることを忘れたものだ。かういふ連中はまた、万一ヒットラーが政権をえなかつたら、今頃ドイツはどんなことになつてゐたかといふ問題に答へることを忘れたものだ。

問題は簡単且つ明白である。つまり、奴隷の桎梏から解き放たれることは、各人の個人的な犠牲なしには不可能なのである」<sup>20)</sup>。

このように、ヘディンは第一次世界大戦後、ドイツに過酷な重荷を課したヴェルサイユ条約を強く批判し、それを打破しようとしたヒトラーを擁護したのである。そのため、第二次世界大戦後、こうした言動のためにヘディンの評価は割れることになり<sup>21)</sup>、スウェーデン内外でその影響力は弱まることになった。しかし、スウェーデン・アカデミー会員としての地位は保持し、探検旅行の調査報告書の作成など、学術的な活動に専心した。1952年にストックホルムで死去している（享年87歳）。

そのヘディンが1948年に賀川を推薦していたのである。スウェーデン・アカデミーには、推薦状ファイル等の史料が保存され、50年ルールの下で管理されている。しかし、このヘディンの推薦については、推薦した事実は記録されているが、推薦状自体はスウェーデン・アカデミーに残っていない。スウェーデン・アカデミーによれば、推薦状という形ではなく口頭での推薦であったため、文書は残っていないのではないかという見解であった<sup>22)</sup>。そのため、ヘディンが賀川をいつ、いかなる理由によりノーベル文学賞に推薦したかは不明である。

推薦の背景を知るためには、ヘディンがそれまでスウェーデン・アカデミー会員として誰をノーベル文学賞に推薦していたかを見るのが手掛かりになるかもしれない。表3は、ヘディンによ

表3 ヘディンのノーベル文学賞候補推薦一覧

選考年	候補者	職業・肩書・国籍	ノーベル文学賞 選考結果	備 考
1938	パール・バック (Pearl Buck)	作家・ アメリカ	同年受賞	『大地』(1931年)などの作者。同年、スウェーデン・アカデミーの他の3会員もパール・バックを推薦している。
1938	マーガレット・ミッチェル (Margaret Mitchell)	作家・ アメリカ	受賞者はバック	『風と共に去りぬ』(1936年)の作者。
1939	胡適 (Hu Shih)	哲学者・文学者・ 中国	受賞者はフィンランドのシランパー(Frans Eemil Sillanpää)	北京大学教授・学長、駐米大使、台湾政府外交顧問などを歴任した。
1940	林語堂 (Lin Yutang)	作家・中国	受賞者なし	北京大学教授の後、1939年にアメリカに渡る。1940年と1950年に、パール・バックも林語堂を推薦している。
1948	賀川豊彦	作家・日本	受賞者はT. S. エリオット (T. S. Eliot)	

注：職業・肩書は、基本的にスウェーデン・アカデミーの文書に使われたものを載せた。1950年までを対象にした。

出所：Bo Svensén, *Nobelpriset i litteratur: Nomineringar och utlåtanden 1901-1950, Del II 1921-1950* (Stockholm: Svenska Akademien, 2001) およびノーベル財団ノミネーション・データベースより、筆者作成。



るノーベル文学賞候補の推薦状況（1950年まで）である。これに見られるように、ヘディンはアメリカのミッチェル（Margaret Mitchell）を除き、アジア通との評判通り、アジア関連の作家を推薦していたことがわかる。その中の一人が賀川であった。ヘディン自身は来日経験を有していたが、賀川と直接会ったことがあるのか、また作家としての賀川の存在をどこで知ったかについては不明である。

## （2）スウェーデン・アカデミーの評価

1948年のスウェーデン・アカデミーのノーベル委員会は、4名の会員から構成され、委員は前年と同じ顔ぶれのエステルリング、ベーク、シヴェルツ、グルベリであった。委員長も前年同様、エステルリングが務めた<sup>23)</sup>。

ノーベル委員会の選考で、委員の4名は31名のうちからエリオット、シケリアノス、モーガン（Charles Morgan）の3名を委員会としての推薦候補にすることでは一致しているが、その順位付けで意見が割れている。すなわち、エステルリングは（1）エリオット、（2）シケリアノス、（3）モーガンの順位で3名を挙げている。ベークも（1）エリオット、（2）シケリアノス、（3）モーガンの順位をつけた意見書を出している。シヴェルツは、（1）シケリアノス、（2）エリオット、（3）モーガンの順位で3名を挙げている。グルベリは、エステルリング、ベークと同様に（1）エリオット、（2）シケリアノス、（3）モーガンの順位を挙げている<sup>24)</sup>。エステルリングとシヴェルツの意見書には日付はないが、ベークとグルベリの意見書は1948年9月18日付けとなっている。

4名の委員はノーベル委員会の見解として、1948年9月21日付けで「委員会の多数は、本年のノーベル文学賞にT・S・エリオットを推薦するのに対して、シヴェルツ氏はアンゲロス・シケリアノスを第1位に推している」としたのである<sup>25)</sup>。

これを受けて同年11月4日、スウェーデン・アカデミーはノーベル委員会の多数意見の通り、「現代詩における先駆者としての顕著な貢献」を理由にエリオットを1948年受賞者に決定したのである<sup>26)</sup>。スウェーデン・アカデミーのエリオット評価については、同年12月10日のノーベル賞授賞式においてエステルリングが歓迎演説の中で詳しく紹介している。エステルリングは、エリオットの『荒地』（1922年）、『四つの四重奏』（1943年）などに触れつつ、「これはあるいは矛盾のように聞こえるかもしれませんが、根本的に新しい詩の形式を開拓し、現代詩のスタイルに全面的な革命を創始したこの詩人は、同時にまた、冷徹な推論と精緻な論理を駆使用する理論家であり、歴史的な視点の重要性を飽くことなく主張し、われわれの生活には何らかの不動の価値の基準が不可欠であると主張しつづけた人でもあるのです」と述べ<sup>27)</sup>、エリオットの密度の高い詩作を高く評価しているのである。また、1947年の受賞者と同様に、後に文学全集のために1948年の選考過程について紹介をしたストレムベリイは、スウェーデン・アカデミー内で「エリオット支持派の人々は、大した困難もなくアカデミー会員たちの同意を得ることができた。老ハルストレームの同意さえ得られたようである。実際問題として、エリオットの競争者のうち本

当に脅威となりうるのはただ一人、既に一九二九年に一度ノーベル賞を受けたことのあるトーマス・マンだけだった」と述べている<sup>28)</sup>。しかし、ストレムベリイによれば、そのマンは再受賞がないというノーベル賞の規定から脱落している。そのほかのフランス人候補らについても前年に同国人のジッドが受賞したことで受賞する見込みが非常に少なかったことをストレムベリイは指摘している<sup>29)</sup>。

では、ヘディンの推薦を受けて候補となった賀川に対して、スウェーデン・アカデミーはいかなる評価を下したのであろうか。

ノーベル委員会は、賀川について報告書を作成させている。作成者は、前年と同様にスウェーデン・アカデミー会員のハルストレームである。1948年5月19日付けで作成された報告書は、前年とは異なり、A4サイズ大の用紙1枚の短いものである。すなわち、ハルストレームは「賞への提案は昨年初めてなされ、そのときに原語からの既存の翻訳が許す限りほぼ完全に専門家の判定で扱われた。それ以来、新しい翻訳は出されていない。それゆえ、署名者は、昨年執筆したものに言及するだけである」と述べている<sup>30)</sup>。このように、新たな翻訳が出ていない状況では、前年の推薦の際に作成した報告書に付け足すことはないとされ、賀川は前年の低い評価のまま、選考の早い段階で落選したと考えられる。

この報告書の評価を見ると、非欧米諸国からの候補が選考において有力候補になるためには、翻訳が出され続け、著作活動が注目を浴び、評価を高めることが必要なかもしれない。本稿の第1章第2節で紹介した通り、賀川著作のスウェーデン語訳は、1930年代までは活発に行なわれていたが、1940年代には止まり、全く出版されていない。1938年に『世界におけるキリスト教徒』（書名の英語原語名は *The Practising Christian*）が出された後、次の翻訳は1950年の『小説キリスト』であった。賀川のノーベル文学賞推薦が翻訳の出していない時期と重なったことは、賀川にとって不運なことであった。

## おわりに

以上、賀川が1947年、1948年にノーベル文学賞に推薦された経緯を整理した。スウェーデン・アカデミーの限られた史料に基づいて分析したため、詳細な考察はできなかったが、賀川の推薦状況の概略は紹介できたと思われる。これまでノーベル財団の運営するノミネーション・データベースの情報に基づいた事実関係しか知られていなかったことを考慮すれば、新しい事実を若干は明らかにできたと思われる。

賀川が第二次世界大戦直後にスウェーデン人2名によりノーベル文学賞に推薦されたことは、推薦時期の点でも推薦者の点でも意外な印象を受ける。1950年代末以降、日本人が中心となり、日本人候補を推薦する動きが活発化するが、そうした動きとは一線を画するものである。しかし、賀川の主要著作が1930年代からスウェーデンにおいて数多く翻訳されていたことを考えるなら

ば、賀川が推薦されていたことは単なる偶然とはいええない。特に、ノルウェーと比べると、スウェーデンでは賀川の文学作品が精力的に翻訳されていたため、賀川が宗教家であるとともに、作家として見られたことも不思議ではない。当時、北欧においてこれほど多くの著作が翻訳された日本人はいなかった。第二次世界大戦前から日本の存在を世界に知らしめたという点で、賀川は高く評価できる存在である。

しかし、本稿で紹介したハルストレームの1947年報告書にあるように、賀川の理想主義的な人格は高く評価されたものの、作家としては低い評価であった。1947年受賞者のジッド、1948年受賞者のエリオット、さらに同時期に推薦されていた数多くの著名作家、詩人に比べると、賀川の作家としての洗練さ、国際的知名度は落ちるものであった。賀川が文学に限定されない多種多様な活動をしていたことを考えるならば、かかる低評価は仕方ないことであろう。ノーベル文学賞を受賞することはなかったものの、スウェーデン人から推薦され、ノーベル文学賞の候補となっていた事実だけでも名誉なことであったと考えられる。日本人のノーベル文学賞受賞は、賀川の推薦から20年以上も後の1968年の川端康成が最初である。谷崎潤一郎などの日本人が候補として注目されるようになったのが1950年代末以降であることを考えても、いかに賀川が時代に先駆けていたかがわかるのである。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

#### 註

- 1) Bo Svensén, *Nobelpriset i litteratur: Nomineringar och utlåtanden 1901-1950, Del II 1921-1950* (Stockholm: Svenska Akademien, 2001), s.369-372.
- 2) *Ibid.*, s.369.
- 3) Brevet från Knut B. Westman till Svenska Akademien, den 31 januari 1946, Svenska Akademien Arkivet.
- 4) Eric J. Sharpe, "Knut Bernhard Westman 1881-1967," *Biographical Dictionary of Chinese Christianity*, <<http://www.bdconline.net/en/stories/w/westman-knut-bernhard.php>>. "Vem är Vem? Svealand utom Stor-Stockholm 1964," <<http://runeberg.org/vemarvem/svea64/0888.html>>. 2013年11月5日アクセス。
- 5) ノーベル財団ノミネーション・データベースでは、賀川の推薦しか出てこない。また、1950年までのノーベル文学賞選考を記録した以下の文献も同様である。Svensén, *op.cit.*
- 6) Brevet från Knut B. Westman till Svenska Akademien, den 31 januari 1946, Svenska Akademien Arkivet.
- 7) この文献は以下の論文集に収録された論文であり、アメリカ人のアクスリングによる賀川紹介本 (William Axling, *Kagawa* [New York: Harper and Brothers, 1932]) などに依拠して書かれたものである。Knut Westman, "Kagawa, en nutida japansk kristen," *Studier och tankar tillägnade J. A. Eklund på hans sjuttioårsdag den 7 januari 1933* (Stockholm: Diakonistyr., 1932), s.210-232.
- 8) *Nobelstiftelsens Kalender, 1947* (Stockholm: P. A. Norstedt & Söner, 1947), s.26.
- 9) Svensén, *op.cit.*, s.377-382.ジッド (1869～1951年) はフランスの小説家であり、著作には『狭き門』(1909年)、『賈金つかい』(1926年) などがある。シケリアノス (1884～1951年) はギリシャの詩人であり、著作には『幻を見るもの』(1909年)、『人生への序章』(1917年) などがある。エリオット (1888～1965年) はアメリカ生まれのイギリスの詩人、批評家であり、著作には『荒地』(1922年)、『四つの四重奏』(1943年) などがある。以上の人物紹介は『ブリタニカ国際大百科事典』による。
- 10) Svensén. *op.cit.*, s.382.
- 11) *Ibid.*, s.383.
- 12) アンダーシュ・エステルリング「アンドレ・ジッドに対するノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説」(『ノーベル賞文学全集10 アンдре・ジッド フランソワ・モーリヤック』主婦の友社、1971年)、10頁。*Les Prix Nobel, en 1947* (Stockholm: P. A. Norstedt & Söner, 1949), s.41, 45.
- 13) シェル・ストレムベリイ「アンドレ・ジッドに対するノーベル文学賞授与の選考経過」(『ノーベル賞文学全集10 アンдре・ジッド フランソワ・モーリヤック』)、7頁。

- 14) ガブリエル・ピュオー代読「受賞演説」(『ノーベル賞文学全集10 アンドレ・ジッド フランソワ・モーリヤック』)、13頁。
- 15) Svensén, *op.cit.*, s.375.
- 16) Per Hallström, "TOYOHICO KAGAWA,"den 28 juni 1947, Svenska Akademien Arkivet.
- 17) Svensén, *op.cit.*, s.385-387.
- 18) ヘディンの伝記として、たとえば以下を参照。金子民雄『ヘディン伝——偉大なシルクロードの探検者——』(中公文庫、1989年)。
- 19) 深田久弥、榎一雄監修『ヘディン中央アジア探検紀行全集』全11巻(白水社、1964～1966年)。深田久弥、榎一雄、長沢和俊監修『ヘディン探検紀行全集』全15巻、別巻2巻(白水社、1978～1980年)。深田久弥、榎一雄、長沢和俊監修『スウェン・ヘディン探検記』全9巻(白水社、1988～1989年)。
- 20) スウェン・ヘディン『獨逸への回想』道本清一郎訳(青年書房、1941年)、334～335頁。なお、漢字の旧字体を新字体に改めた。
- 21) ナチス・ドイツとの関係について、「……ヘディンは決してナチス信奉者でも同調者でもなかった。事實は、ヨーロッパを戦争の災禍から救うために奔走した人物であり、ナチス寄りというのは、真実を知らぬ作られた伝説であった」(金子、『ヘディン伝——偉大なシルクロードの探検者——』、8頁)、「ヘディンのベルリン訪問はなんと理窟をこねたところで、はっきりした情報収集、すなわちスパイ活動に外ならなかった」、「とにかくヘディン一人の独断と独走のように見えるベルリンでの行動も、実は全てスウェーデン国王と政府との、密接な連携プレーだったことである。世間でいわれているような、ナチやヒトラーのスポークスマンではなかった」(金子民雄『秘められたベルリン使節——ヘディンのナチ・ドイツ日記——』中公文庫、1990年、13、431頁)との見方があるものの、ヘディンが第二次世界大戦終結までナチス・ドイツの要人たちと親密な関係を有し、政治活動に熱心であったことは、探検家ヘディンの評価を難しくしたことは事実である。
- 22) スウェーデン・アカデミー・アーカイブ担当者の見解(2013年3月6日、ストックホルムのスウェーデン・アカデミーにて)。
- 23) *Nobelstiftelsens Kalender, 1948* (Stockholm: P. A. Norstedt & Söner, 1948), s.26.
- 24) Svensén, *op.cit.*, s.392-395. モーガン(1894～1958年)はイギリスの小説家、評論家であり、著作には『泉』(1932年)、『航海』(1940年)などがある(『ブリタニカ国際大百科事典』)。
- 25) Svensén, *op.cit.*, s.396.
- 26) *Ibid.*, s.396.
- 27) アンダーシュ・エステルリング「T・S・エリオットに対するノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説」(『ノーベル賞文学全集24 G・ミストラル T・S・エリオット クワジーモド サン＝ジョン・ベルス セフェリス ネリー・ザックス』主婦の友社、1972年)、63頁。*Les Prix Nobel, en 1948* (Stockholm: P. A. Norstedt & Söner, 1949), s.45, 49-50.
- 28) シェル・ストレムベリイ「T・S・エリオットに対するノーベル文学賞授与の選考経過」(『ノーベル賞文学全集24 G・ミストラル T・S・エリオット クワジーモド サン＝ジョン・ベルス セフェリス ネリー・ザックス』)、59頁。
- 29) 同上、59～60頁。
- 30) Per Hallström, "TOYOHICO KAGAWA,"den 19 maj 1948, Svenska Akademien Arkivet.

#### 付記

スウェーデン・アカデミーにおける調査では、アーカイブ担当のLinda Örtenblad氏、司書のCarina Cederroth氏に大変お世話になった。また、国内の調査では、財団法人雲柱社賀川豊彦記念松沢資料館学芸員の杉浦秀典氏に大変お世話になった。さらに、本学経済学部の秋朝礼恵先生からも貴重な御助言を賜った。ここにお名前を記し、お礼申し上げます。

本年度をもって本学地域政策学部を定年退職される津久井良充先生、戸所隆先生、原田寛明先生には、これまでの御指導に対して心よりお礼申し上げます。御研究のますますの御発展と御健勝を祈念いたします。

本稿は、2012年度、2013年度高崎経済大学研究費による研究成果の一部である。高崎市および高崎経済大学に感謝申し上げます。

訂正

賀川豊彦に関する以下の拙稿において誤りがありましたので、ここにお詫びするとともに訂正いたします。

- (1) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル文学賞と日本:日本人初の文学賞候補、賀川豊彦——」(1) (『地域政策研究』第16巻第1号、2013年8月)、11頁、表4および13頁、註30。

理由：ノーベル賞受賞者の言語別人数を数えた際、1981年受賞のカネッティ（イギリス）を英語でカウントしたが、実際はドイツ語が正しい。そのため、1980年代と2012年時点の欄に記された英語およびドイツ語の人数で変更が生じるため、以下の通り正しいものと差し替えます。

- ① 11頁、表4

正：

表4 ノーベル文学賞受賞者の言語別人数

言語名	1900年代	1910年代	1920年代	1930年代	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計(2012年)
英語	1		2	4	2	3	1	2	2	4	4		25
フランス語	1	2	2	1	1	2	3		1		1		14
ドイツ語	2	3	1		1		1	1	1	1	2		13
スペイン語	1		1		1	1	1	2	2	1		1	11
スウェーデン語	1	1		1		1		2				1	7
イタリア語	1		1	1		1		1		1			6
ロシア語				1		1	1	1	1				5
ポーランド語	1		1						1	1			4
ノルウェー語	1		2										3
デンマーク語		2			1								3
ギリシャ語							1	1					2
日本語							1			1			2
中国語											1	1	2
オクシタン語	1												1
ベンガル語		1											1
フィンランド語				1									1
アイスランド語						1							1
セルボ・クロアチア語							1						1
ヘブライ語							1						1
イディッシュ語								1					1
チェコ語									1				1
アラビア語									1				1
ポルトガル語										1			1
ハンガリー語											1		1
トルコ語											1		1
計	10	9	10	9	6	10	11	11	10	10	10	3	109

註：言語名は、2012年時点の受賞者人数の多い順に並べた。同数の場合は、受賞年が早い順に並べた。

1913年のタゴールはベンガル語と英語、1969年のベケットはフランス語と英語、1987年のプロツキーはロシア語と英語で執筆したが、それぞれベンガル語、フランス語、ロシア語のみで便宜上分類している。

受賞を辞退した1958年のパステルナーク、1964年のサルトルも含む。

出所：2012年については、ノーベル財団ホームページ<[http://www.nobelprize.org/nobel\\_prizes/literature/shortfacts.html](http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/shortfacts.html)>に基づくが、英語とフランス語については人数を修正した。それ以外の年代については、筆者が集計、作成した。

- ② 13頁、註30

正：

- 30) ノーベル文学賞受賞者の言語別人数について、本稿の表4とノーベル財団ホームページに存在する表 (Facts on the Nobel Prize in Literature, <[http://www.nobelprize.org/nobel\\_prizes/literature/shortfacts.html](http://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/shortfacts.html)>) との間で、2012年の英語人数とフランス語人数に差が出ている。表4が英語25名、フランス語14名であるのに対して、ノーベル財団の表は英語26名、フランス語13名となっている (内訳の詳細は記されていない)。この差は、1969年受賞のベケットをノーベル財団の表が英語で計算し、他方本稿の表4がフランス語で計算しているため生じていると考えられる。筆者の考えるフランス語の内訳は以下の通りである。

1901年ブリュドム、1911年マーテルランク、1915年ロマン・ロラン、1921年アナトール・フランス、1927年ベルクソン、1937年マルタン・デュ・ガール、1947年ジッド、1952年モーリヤック、1957年カミュ、1960年サン＝ジョン・ペルス、1964年サルトル、1969年ベケット、1985年シモン、2008年ル・クレジオ。

吉 武 信 彦

- (2) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：第二次世界大戦後の日本人候補、賀川豊彦——」(2・完)  
(『地域政策研究』第15巻第4号、2013年3月)、5頁、下から12行目。

理由：賀川に関する1955年報告書を執筆したノーベル委員会顧問のヴォル (Knut Getz Wold) は経済分野の顧問として活躍したが、その職業は当時「貿易省局長」であった。後にノルウェー中央銀行総裁にまでなった。それゆえ、以下の通り訂正いたします。

誤：「事務所長」

正：「貿易省局長」